

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：32632

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02788

研究課題名(和文)日本の近代化に寄与した『福恵全書』における付訓語に関する基礎的研究

研究課題名(英文)Basic study on "Fukukei-Zensho"

研究代表者

荒尾 禎秀 (ARAO, Yoshihide)

清泉女子大学・付置研究所・客員所員

研究者番号：20014813

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：和刻本『福恵全書』の享受に関しては、江戸中期に為政者や儒者、通事に読まれていた中国版本『福恵全書』が和刻されたことにより一層広汎な知識人に読まれ、明治初期には法制研究にも用いられたことを明らかにした。また書誌調査による諸本の分類、訳解付き漢字語検索のためのデータベースの作成は基礎的な研究としての成果である。近代日本語語彙の研究としては、本書に使用の中国語の一部は新漢語となった可能性が認められ、日本語化する仕組みとしては中国語彙の左に付された振仮名が有効に機能していることを考察した。また訳解(左振仮名)の語彙や文体は口語性を持つこと、本書は明治期の辞書にも影響を与えていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

和刻本『福恵全書』は現存部数も多く、享受された歴史もあり、日本語学のみならず、近代法制史、近世近代中国地方社会史、書誌学や翻訳学など学際的学問価値を有する資料であることが予測される。本書そのものの研究はきわめて少ないなか、本研究での享受史、諸本書誌に関する研究成果は今後の多方面での研究に益するところがある。また諸本調査の結果を反映させたデータベースの作成により、多数存在する印刷が悪い訳解(左振仮名)箇所判読が可能となり、訳解付き漢字語の検索が容易になったことは、今後展開される日本語学の近代語彙の研究にとって意義があり、また学際的な領域の研究にとっても有益である。

研究成果の概要(英文)：The study revealed the following: The Chinese version of Fukukei-Zensho (福恵全書) in Japan was read by politicians, Confucians, and interpreters. After that, when this book printed in Japan, it was read by more people including intellectuals, and it was also used for legal research in the early Meiji era. As a study of modern Japanese, I could point out the possibility that the Chinese vocabulary of Fukukei-zensho became the Japanese Kango (漢語). It is speculated that the form of Furigana (振仮名) to the left side of the Kanji (漢字) worked effectively for that. Moreover, it was clarified that the vocabulary and style of Furigana are colloquial, and that the vocabulary of this book has an influence on the dictionary of the Meiji period. For future research, it is required to utilize the results of bibliographical surveys and the database that allows easy retrieval of Kanji words with left-handed Furigana. This study yielded basic results for future research.

研究分野：日本語学

キーワード：福恵全書 和刻本 書誌研究 データベース 漢字語 訳解 左振仮名

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近代日本語の「新漢語」の創成と伝播についての仮説として、近世中国書籍の和刻本乃至それと関係のある書籍にみられる左振仮名付き漢字語がその左振仮名を媒介として日本語化したと考え、そこには白話小説のほか特に漢文戯作類の関与が大であったろうと推定して、これまで研究をしてきた。本研究もその一環としてある。

『福恵全書』は中国康熙年間の刊行で地方官吏の執務心得書とされる。わが国でも書陵部蔵本始め 20 部以上が現存する。小説戯作類とは一線を画する書物であるがその和刻本(以下「本書」という)は左振仮名(以下「訳解」という)を多数持つことやその享受の状況から、日本近代語彙の研究資料としての価値や、本書の近代日本に及ぼした影響が予測される。然るに本書そのものの研究はほとんどない。その初印年は不明だが、訓訳した小畑行簡による序文には嘉永三年とある。本書の出版経緯、諸本の書誌的状況、本書利用の実態といった基礎的な事柄はほとんど研究されていない。中国版や本書を資料として用いた研究は、中国明清時代地方社会史や近代法制史などの領域では蓄積があるようだが日本語学の分野では少ない。近世近代中国語で幕末明治初期に日本語として使われるようになったいわゆる「新漢語」や近代刑法用語などの用例確認の資料として用いられるにとどまる。これまでその資料的価値が定まっていないこと、本書が大部であること、訳解付き漢字語の検索には二種類の索引が公刊されてはいるがともに語数が極めて少なく困難があったこと、訳解に判読しにくい箇所が多いこと等、日本語学は勿論、関連する研究領域でも本書を活用する環境は整っていない状況にあった。

2. 研究の目的

日本の近代化を考察する上での本書の資料的価値は予測されながらも、本書そのものに関する基礎的研究がなく、また利用のための工具も甚だ不十分なのが現況であった。そこで次の三点を研究目的とした。(1) 本書についての書誌的基礎研究を行うこと。これにより本書の成立、流布、諸本の分類などの基礎的な事実や状況が明らかになる。(2) 本書を使用する上で有益なデータベースの作成と紙媒体での索引のための検討を行うこと。これにより本書の全ての訳解付き漢字語の検索が可能になれば、近世近代語の語彙の研究や学際領域の研究に資するところが大きい。(3) 本書が近代日本漢語とどういう関わりを持つかの研究、及び本書の享受史の基礎的研究を行うこと。

これにより本書がどのように享受され利用されたかの見通しを得ることができ、本書の資料的価値の一端も明らかにできると考えた。

3. 研究の方法

上記 2.(1) については、現存する部数が多数であるがその間では訳解に関して異同のないテキスト(以下「通行本」という)と、その類と比較すると訳解などや書誌的事項に異同をもつ一類(以下「修訂本」という)とがあるので、前者の通行本の一本を底本として、諸本の書誌と異同を調査した。(2) のデータベースについては、通行本を底本にして全ての訳解付きの漢字列を抜き出して作成することとした。この際、用いる字体は常用漢字表にある漢字はそれに依ることとし、異体字の処理は主として『新潮日本語漢字辞典』に依った。(3) の本書と近代日本語との関係に関する基礎的研究としては、ケーススタディとして明治九年刊『福恵全書和解』を例に本書がどのように近代日本語の語彙の創成に関わった可能性があるかを考察する。また本書が影響を与えた可能性のある明治期の辞書類を発掘する。本書享受を把握するために、諸資料から関係記述を探し出すことにも努める。これらの基礎的な研究成果を総合的にみることで、和刻本『福恵全書』が日本の近代化に果たした役割の考察を試みる。

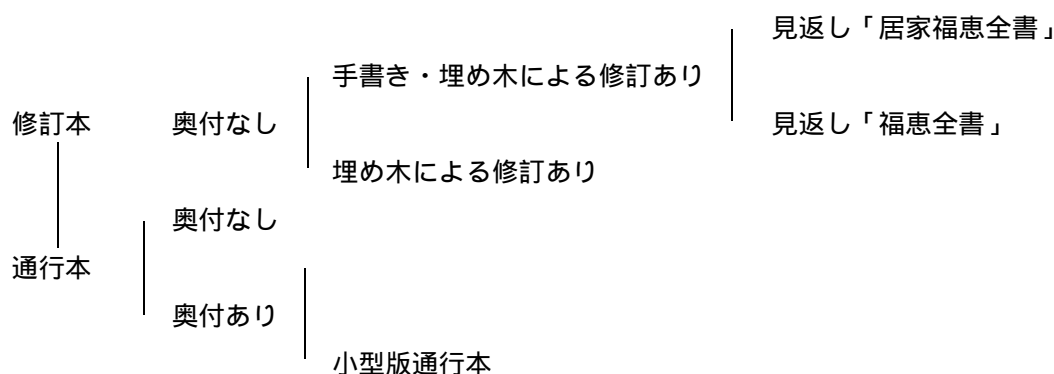
4. 研究成果

(1) 書誌的研究

本書の諸本に関する研究報告は管見では見当たらず、本研究により初めて明らかになった。本書は仕立ての総冊数こそ違おうが十四の部立てや巻数など全て中国版本と同一である。さらに版面の行数、一行の文字数も、使用する漢字字体も中国版本と同じである。圏点もかなりをそれに依っている。ただし「和刻本」が数種の中国版本のうち何に依ったかは今後の研究に俟つ。

和刻本の諸本を分類する上での根拠として、一つは外見上特徴的な異同があり、もう一つは訳解や本文などの異同がある。(調査は継続中で、以下は現段階のものである。)

まずは特徴的な外見上の異同をもとにすると、次のように分類される。



初印本の訳解や漢字、訓点などの不適当な箇所を手書きで修訂したテキストがあり、それに基づいて埋め木などをして印刷したテキストができ、そのような修訂と印刷が何度か行われた結果、その過程にあったテキストのいくつかが残存した、と推定する。これが「修訂本」である。その最終段階として成立したテキストは多くの部数が印刷された。これが「通行本」で、以降修正の手は加えられることはなかった。これが諸本の概略である。なお、管見では異版はなく、全て同一の版木による。また、初印本と考えるテキストは見出していない。

通行本と修訂本との大きな違いとして、訳解や本文などの修訂ということ以外に次の三点を挙げることが出来る。修訂本の中にはこのうちの一部を欠くものがあるが、通行本ではその何れもが該当しない。

(ア) 第一冊見返しのほか、第七冊、第十三冊の見返しにも書名等の印刷がある。

(イ) 尾題が丁裏にはない巻がある。巻三は表裏いずれにも尾題がなく、巻四、八、十、十一では最終丁の表にそれがある。巻三十一は最終丁の表裏両面にそれがある。

(ウ) 本文中に形式上不要な縦罫線が、巻五1丁裏6行目以降、巻六7丁表7行目以降、巻六8丁裏7行目以降の三箇所にある。

以下、上図に従い順次概略を述べる。

修訂本は、手書きないし胡粉での修訂、あるいは埋め木や細工による修訂を加えていることがその特徴である。このうち、埋め木などに依るだけでなく手書きや胡粉による修訂があるテキスト と、手書き修正のない埋め木や細工のみによる修訂のテキスト とに分けられる。

は、第一冊にある見返しの書名部分に「居官福恵全書」とあるのが特徴である。またこの類には、上記(ウ)の縦罫線がある。この罫線は多くの中国版本にはあるので、それに倣ったものと思しく、和刻本としては初期のものだと断定できる。また他の諸状況もこれを支持する。これに属するテキストは8部現存する。この8部は更に六冊本と十八冊本とに分かれるものと推定する。六冊本は4部ある。六冊本とみるのは、あるいは十八冊のうち的一部分である零本である可能性も残るが、例えば表紙に「共六冊」、小口に「福恵全書六止」と書く一本があることや詳細を省くが修訂の全体的な様相から、この六冊本が現存する諸本の中では最初に修訂作

業を受けたひとまとまりのセットだと考えうる徴証がある。十八冊本は第七冊、第十三冊に書名を「福恵全書」と印刷した見返しがある。も手書き修訂があるが、第一冊の見返しには第七冊、第十三冊と同様、書名を「福恵全書」と印刷する。この類は7部を確認している。うち3部は上記の(ウ)の縦罫線を持つので、に続くこの類の中では早いものと言える。は、見返しや尾題などに修訂本としての特徴を持つが、修訂箇所については全て埋め木などによる印刷であることが特徴である。手書きや胡粉の使用例がないのはなぜであるかは、外的事情として時間的あるいは経費的な問題や、幕末の世情といったことも考えられるが、出版の段取りに関わる事情があったかもしれない。今後の研究を俟ちたい。この類に属する修訂本は9部を数える。

以上が修訂本である。なお手書きの修正箇所は諸本間で共通性があるところから、修訂本はテキストの所有者が偶々個別に任意に修訂した結果の集積というよりも、何人かの者が同時に修訂作業を行ったものと考えの方が説明の付くところが多い。第十三冊目以降は手書きの修訂はほとんどなくなっているので、全十八冊が各六冊ずつまとめて順次何度か印刷され修訂されたと推測する。その最後の段階では第一冊目から全巻通しての修正が行われて、その結果出来上がったものが通行本であろうと推測する。修訂作業が何回あったかなどその間の事情などについては未詳である。修訂本は、都合24部を確認した。この他に修訂本二冊分だけが残存のテキスト、通行本に修訂本二冊分を取り合せているテキストもある。

修訂本について如上の分類を得たが、修訂箇所が約二千箇所あることもあって各類内部の順序については単純に判断できない。先に述べたように三分割して修訂作業が進んだとすると、当該テキストが取り合せ本になっている可能性も生ずる。今後も引き続き研究していく。

以下の通行本について概略を述べる。修訂本に対して、その特徴を持たないものを通行本と称する。通行本とよぶのは現存する数が多いことに依る。公共図書館、大学図書館が所蔵する約150部ほどがこれに属する可能性を持つ。通行本は、第十八冊目末尾に書肆名が記載された奥付一丁の有無により、二類に分け、また奥付のあるものには小型版があるので、これを別類とした。の通行本は、国立公文書館や国立国会図書館をはじめ120部程度はであると推定する。現存する和刻本はほとんどこれに属すると言ってよい。この類は から までと同様に奥付が無い。また奥付なしのテキストの表紙は縹色そして鶯色で、見返しの料紙の色はいずれも白である。重印があったかは不明。これに対して通行本 は、奥付があるのが特徴で、ほとんどが表紙は黄色、見返しは紅色である。奥付は第十八冊末尾に一丁ある。「東京日本橋通壱丁目 須原屋茂兵衛」以下「河内屋文助」まで十書肆の名が、その丁の裏には「東京外神田五軒町 林安之助」から「大橋操吉」までの、出版人と思われる四人が名を連ねている。ここに「東京」とあることから、普通であれば明治期の発兌と知られる。発兌に関しての年号の記載はないが、明治十四年、十五年に林安之助等の新聞広告が出ているので凡そはその頃であると推測されるが、今後なお調査したい。の小型版通行本は、表紙の寸法は凡そ230 耗×155 耗で、他のものが258 耗×173 耗であるのに比して小ぶりになっている。料紙を上下裁断したもので印刷面の寸法は同じである。印刷貼り題簽も他の類のものと同じである。小型版は全国の図書館には30部程度が所蔵されている。小型版 は より後に出されたとみるのが妥当と考えるが、裏付けとなるものはない。

(2) 訳解付き漢字語のデータベース化と索引作成

和刻本『福恵全書』の資料としての利便性を増すために、データベースの作成を行い、これに基づき紙媒体での索引を作ることを想定して、パソコン上で原稿を作成してみた。

データベースは、漢字語のうち訳解が付されているもの全てを取り出し一覧にした。基本情

報は所在、漢字語、訳解、修訂の有無から成る。索引化に際しては、四字以上の漢字列の中途にある漢字語の空見出し化、底本と修訂本との校異表の作成方法が課題であった。また索引は漢字音による排列としたので、総画順の出現漢字一覧表を作成して採用した漢字音を知れるようにした。ここで用いた底本は、類の通行本に属する家蔵本によった。修訂の校異については家蔵の類と類の各一本を代表させた。

訳解の仮名文字には埋め木が多数のためか崩れや欠刻、墨付きのむらなどにより読みにくい箇所が少なくない。必要に応じてインターネット上で公開されている通行本や修訂本の調査結果も参考にした。これにより難読箇所はほぼ解消された。出現順に記録されたデータ項目は約三万五千である。

訳解の記載表記は原則底本通りとし、仮名遣いや濁点の有無も底本に従った。通行本と修訂本とで異同がある項目については、別途作成の校異表を参照できるように、所在表示に校異があることを示す符号を付加した。紙媒体のために試行した索引は、漢字語を第一字目の漢字から順次五十音順に配列して、漢字語に対する訳解と所在が容易に検索できるようにした。

通行本と修訂本との訳解の異同は同時に作成された「校異表」によってその様子が知られる。この校異表は今後、修訂本二十余本全体での異同の様相が分かるように改編したい。またその結果を通して、修訂本がどのような経緯を経て通行本の出現をみたかを明らかにしたい。

(3) 本書が日本近代漢語に果たした役割及びその享受史の基礎的研究

江戸期における中国版『福恵全書』の享受と、和刻本の利用との二方面からの研究を行った。

中国版の享受については、先学の研究成果や資料からの新たな発掘から次のようなことが明らかとなった。享保十二年以降の「舶来書目」には『福恵全書』が記載されている。中国版本は遠山荷塘や田能村竹田がそれぞれ会読をしており為政者、唐話学者、儒者、通訳などに読まれた。和刻本が作られた経緯は未だ不明であるが、「詩山堂」の私家版として出版作業が進んだのではないかと推察される。大部な翻刻に加えて多数の訳解を付し、かなりの数の眉注により本文の漢字の検討結果も示しているため、要した日子、経費は相当であろうと推察される。この間の事情は今後の研究に俟つ。完成した通行本がいつからどのようにして流布することになったのかも不明であるが、いくつかの徴証から、読者層は時代の先駆者や学校関係者、豪農にも広がり、明治初期には法制資料ともなった。また明治期の漢語辞書等にも影響を与えた。

本書を資史料としての研究は、大別すれば日本語学、日本近代法制史、中国近世近代地方史などになる。このうち日本語学について述べれば、ある新漢語が近世近代中国語に由来することを証明する一つの資料として用いられることが多い。また近代法制史にかかる語彙がどこに由来するかを検証で本書との関係を述べたものもある。ただし、本書の訳解そのものについての研究はこれまで無いようである。このような中で、本研究においては三編の論文を公にした。いずれも本研究で作成したデータベースを利用した。一つは本書と『福恵全書和解』を比較して、本書がどのように敷衍され近代漢語の創成にどうかかわったかを左振仮名の機能に絡めて論じた。一つは、本書の語彙が柴野栗山の辞書『雑字類編』欄外に補充語彙として書き入れられていることを証明し、本書が辞書史上で果たした役割について論じた。一つは、本文左に付された訳解と本文の訓点の送り仮名とで助詞「へ」「二」のあらわれ方には違いがあることに注目し、訳解が口語性を持つことを論じた。これらにより、本書が日本の近代化に関わったことや本書に資料的価値があることの一端が明らかになった。

以上のように、目的とした書誌的調査、データベースの作成、本書に関する日本語学的な研究及び享受史の研究を行うことができた。今後、得られた成果を公表し、また残っている少なからぬ課題の研究を行っていく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 荒尾禎秀	4. 巻 第21集
2. 論文標題 『福恵全書』抄訳本の左振仮名について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近代語研究	6. 最初と最後の頁 295-312
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒尾禎秀	4. 巻 第1集
2. 論文標題 『雑字類編』の書き入れ語 『福恵全書』との関連を巡って	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 論究日本近代語	6. 最初と最後の頁 65 - 79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒尾禎秀	4. 巻 第41号
2. 論文標題 和刻本における左振仮名の性格 『福恵全書』の助詞「へ」「二」からの考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 清泉女子大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 23 - 39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----